

12月1日 待降節第1主日

イザ 2:1～5 ロマ 13:11～14a マタ 24:37～44

1. マタ

v.42 「だから、目を覚ましていなさい。いつの日、自分の主が帰って来られるのか、あなたがたには分からないからである。」

典礼暦の最初の主日のミサで、今年も私たちは「目を覚ましていなさい」と呼びかけられています。新しい一年を歩み始める教会は毎年、会衆一同に向かってミサの聖書朗読を通して、「人の子が来る」(v.37)、「人の子は思いがけない時に来る」(v.44)ということへと注意を喚起するのであります。なぜなら、教会とは終わりの日に再臨のキリストを歓呼して迎えるべく招かれている民だからです(ロマ8:17)。

vv.37-38 「人の子が来るのは、ノアの時と同じだからである。洪水になる前は、ノアが箱船に入るその日まで、人々は食べたり飲んだり、めとったり嫁いだりしていた。」

ローマ教皇も、各国の司教団も、現代という時代のいろいろな問題に対して多くの指針を語り、全世界の信者にそれぞれの置かれた立場でこの世に奉仕することを勧めています。実際、“食べたり飲んだり、めとったり嫁いだり”とは、どうでもよいことではなくて、人間が生きていく上での最も基本的な事柄だと理解すべきでしょう。教会が人間のそのような基本的権利を擁護し、すべての人がそれを等しく享受出来るように奉仕することは、いささかも間違っていない。しかし……

vv.40-41 「そのとき、畑に二人の人がいれば、一人は連れて行かれ、もう一人は残される。二人の女が臼をひいていれば、一人は連れて行かれ、もう一人は残される。」

この「連れて行かれ」をヨハ14:3の意味で理解すると、「もう一人は残される」が7:21-23や25:11-12の“お前たちを知らない”と言われる人々のことであるのが分かります。後者の人々も教会に連なる仲間であって、「御一緒に食べたり飲んだりしましたし、また、わたしたちの広場でお教えを受けたのです」(ルカ13:26)と言うに違いありません。しかし……、そうです、彼らは“キリストの福音と、受けた救い”を本当には理解していなかった……“むとんちゃくていた”(ヘブ2:3)ことが、終わりの日には暴露されるのです。

“目を覚ましている”とは、世俗から逃れて修養と瞑想の世界に生きるということではなくて、むしろ世俗の生活と勤めの中にありながら“天にあるわたしたちの本国を思い、そこからわたしたちの主イエス・キリストが救い主として来られるのを待っている”(フィリ3:20)という、教会の信仰に固く立つことです。

2. ロマ

v.11 「…… 救いは近づいているからです。」

洗礼によってキリスト・イエスに結ばれた私たちは、“この世”と“後の世”(マコ10:30)の二つの“世”

にまたがる“時の終わり”(Iコリ10:11)に生きているのだということを、今再び思い起こしましょう。私たちに与えられた救いが、その完成に至る日が近づいているからです(フィリ1:6, 2:12)。

全般的に見て、前世紀の教会はその説教において、キリストの福音の終末的使信を語る事が極めて稀でありました。それにもかかわらず、カトリック教会が典礼暦の最初の期節である“待降節”を、“降誕の祭典の準備期間であると同時に、終末におけるキリストの第二の来臨の待望へと心を向ける期間でもある”と、明確に宣言していることに私たちは注目しなければなりません。「主イエス・キリストを身にまといなさい」(v.14)とは、“洗礼を受けてキリストに結ばれたすべての信者は、約束による神の国の相続人である”(ガラ3:26-29)ということ、もう一度思い起こしなさいという意味です。教会はキリストの福音の終末的使信を聞くこの待降節から、また新しい一年を歩み始めるのです。

3. イザ

v.2 「終わりの日に ……」

これは“この世”に属する将来のことではなくて、救済史の完成である“後の世”についての、イザヤが見た幻であることを、明確にしなければなりません。と言うのはこのテキストが、あたかも地上の平和運動を奨励する都合のよいテキストでもあるかのように、しばしば人々に利用されて来たからです。

「剣を打ち直して鋤とし、槍を打ち直して鎌とする」(v.4)という平和運動によって、地上に神の国を実現することが可能であるという無責任な幻想が、多くの善意の人々を駆り立てて来たのは、否定出来ない事実であります。しかし、どうか誤解しないでいただきたい。神の国は人間に実現可能な行動計画や目標などではありません。それは神の救済史に属する事柄であって、教会にはただ「み国が来ますように」と父に祈ることだけが許されているのです。

v.5 「ヤコブの家よ、主の光の中を歩もう。」

新しい一年を歩み始める私たち教会は、終わりの日に再臨のキリストを歓呼して迎えるべく招かれている民なのです。 アーメン、ハレルヤ。

12月8日 待降節第2主日

イザ 11:1～10 ロマ 15:4～9 マタ 3:1～12

1. マタ

v.7 「蝮の子らよ、差し迫った神の怒りを免れると、だれが教えたのか。」

イエス・キリストが教会の主であり(フィリ2:11)、その頭である(コロ1:18)ということは、私たちが差し迫った神の怒りとは無縁となり、それを免除されているという意味ではないことを、先ず強調しなければなりません。

私たちが生きている“この世”は、神に敵対する悪魔の支配下にあり(コロ1:21、ヘブ2:14-15)、それは“神の怒り”の対象であります(黙6:17)。私たちはかつては罪の奴隷でしたが(ロマ6:17)、キリストの血によって義とされ(ロマ5:9)、神の子とされました(ロマ8:14-15)。このキリストが、私たちに来たるべき“神の怒り”から救ってくださるのです(ロマ5:9、1テサ1:10)。それは免除されたり、逃れさせてもらえるという意味ではありません。

v.9 「“我々の父はアブラハムだ” などと思ってもみるな。言うておくが、神はこんな石からでも、アブラハムの子たちを作り出すことがおできになる。」

神の怒りからの救いは、形式的にカトリック教会に所属していれば自動的に与えられるというようなものではなくて、信仰という「良い実を結ぶ」(v.10)者に与えられます。だから、「恐れおののきつつ自分の救いを達成するように努めなさい」(フィリ2:12)と勧められているのです。

私たちは“体の贖われる復活の日”(ロマ8:23)までは、罪と死の支配するこの世で苦しみもだえている者たちです(IIコリ5:1-5)。教会は、信者に天国行きの無料招待券や不死の妙薬を与えたりするわけではありません。「罪が支払う報酬は死です」(ロマ6:23)とは、私たちの人生そのものが、生きている今も、死の支配下にあるということです。アヴェ・マリアの祈りにある“今も、死を迎える時も”とは、そういう意味です。「悔い改めよ」(v.2)とは、ただの善人になりなさいということではなくて、“教会に委ねられた信仰の遺産”(カテキズム/使徒憲章)であるキリストの福音を理解し、信じる者になりなさいということなのです。

2. ロマ

v.7 「だから、神の栄光のためにキリストがあなたがたを受け入れてくださったように、あなたがたも互いに相手を受け入れなさい。」

使徒パウロがローマ訪問を計画していた時にも、そして実際にローマに滞在するようになった時にも、ユダヤ人キリスト者は異邦人キリスト者に対して激しく対抗していました。一世紀末に聖クレメンス一世教皇によってコリントの教会に当てて書かれた手紙には、当時多くの選民が“ねたみと争いのゆえに”(フィリ1:15)苦難を受けねばならなかったと言及されています。ローマにおけるパウロとペトロの殉教も、そのよう

な人々の側からの通告に勇気づけられて、ローマの官権によって執行されたと推測されるのです。

過去の歴史において各地に散在するユダヤ人が、キリスト教の側からの激しい憎悪や迫害を受けて来たことは、よく知られています。第二バチカン公会議は再び聖書の教えに立ち帰って、次のように宣言しました。「教会は……あたかも聖書から結論づけられるかのように、ユダヤ人は神から見捨てられた者としても呪われた者としても紹介されることがあってはならない。」(キリスト教以外の諸宗教に対する教会の態度についての宣言 4) 「(ユダヤ人への)神の賜物と招きとは取り消されないものなのです。」(ロマ 11:29)

使徒パウロも、「聖書から忍耐と慰めを学ぶ」(v.4)ことを教えましたが、それで教会の内外にある“ねたみと争い”という現実には何らかの実際的な解決が可能であると考えよりも、むしろ神の国への「希望を持ち続ける」(v.4)ようにと勧めています。人間が自らの能力によって、この世に平和な世界を創出するなどという不毛な理想論と、キリストの福音とは区別されなければなりません。“私たちが御国を受け継ぐということの保証として、神は聖霊を与えてくださいました。それで、私たちはいつも心強い”(II コリ 5:5-6、エフェ 1:14)というのが、福音の与える“希望”です。典礼暦を重んじる全世界の教会は、今年も待降節第2主日に、この“希望”によって“忍耐して待ち望む”(ロマ 8:25)ことを学びます。

3. イザ

v.10 「その日が来れば……」

このテキストは、やがてダビデの子孫から出現する終末的なメシアの預言として、旧約聖書において伝承されて来たものです。ところが前回も言及したように、このテキストもあたかも地上の平和運動を奨励する都合のよいテキストでもあるかのように、しばしば人々に利用されて来ました。このような預言の理解から、“死者の中からの復活によって力ある神の子と定められたキリスト”(ロマ 1:4)が抜け落ちると、そこに残るのはただの“不毛な夢”だけです。

しかし、「(教会は)地上におけるこの(神の)国の芽生えとなり、始まりとなっている。… (そして) … 神の国の完成を渴望し、全力を尽くして、栄光のうちに自分の王と結ばれることを望み求めている。」(教会憲章 5) 私たちはこの期節に、終末におけるキリストの第二の来臨の待望へと心を向けましょう。

アーメン、ハレルヤ。

12月15日 待降節第3主日

イザ 35:1～6a ヤコ 5:7～10 マタ 11:2～11

1. マタ

v.3 「来るべき方は、あなたでしょうか。それとも、ほかの方を待たなければなりませんか。」

ヨハネは牢の中で思い惑っていたと、トゥルナイゼンは彼の説教の中で語っています。現代のキリスト教界で、大多数の信者たちは洗礼者ヨハネ以上に思い惑っている……、いや、聖書の中のキリストを最早ほとんど理解出来ないで、何か別の新しい救いや癒しを見つけ出そうと手探りしています。

v.4 「イエスはお答えになった。“行って、見聞きしていることをヨハネに伝えなさい。”」

聖伝と聖書を通して現代の教会が受け継いで来ている“信仰の遺産”に目を留めなさい、そうすれば“今、現に働いているキリストの福音”(Iテサ 2:2,13)の気配に、あなたは気付くであろう。私たちの知識は一部分にしか過ぎず、不完全ではあるけれども(Iコリ 13:9)、それでも「主の方に向き直れば、(心の)覆いは取り去られます。」(IIコリ 3:16) ですから、だれかが“福音の使者”(v.10)となるのは、知識や学問の多寡によるのではなくて、本物の福音を知り、また感じ取ることによってであります。そのような“本物の福音の使者”は、教会の歴史においてはいつも少数者でありました。

しかし、「キリストは常に御自分の教会と共におられ、特に典礼行為のうちにおられる」(典礼憲章 7)ことを信じることが出来る人、このキリストにつまずかない人は幸いです(v.6)。そして……、

v.11 「しかし、天の国で最も小さい者も、彼よりは偉大である。」

これは、来るべき神の国における将来の話であって(イザ 11:9、エレ 31:34 参照)、“わたしたちは、今は、おぼろ気にしか知っていない”(Iコリ 13:12)のです。それでも、たとえおぼろ気であっても、“本物の福音”が見え、その福音によって歩き始めている人々がいる(v.5)ことに気付きなさいと、主は聖書を通して現代の教会に向かって呼びかけておられます。この方は、栄光のうちに再び来られるキリストです(信条)。

2. ヤコ

v.8 「心を固く保ちなさい。主が来られる時が迫っているからです。」

教会に委ねられた信仰の遺産、すなわち栄光に満ちた秘められた計画(コロ 1:26-27、エフェ 1:18)は、「神のものであって、わたしたちから出たものでない」(IIコリ 4:7)のですから、これを完成されるのは再臨のキリストです。

神の国は決して人間の善意と努力、あるいは道徳的進歩によって、地上に実現出来るものではありません。それは「御国が来ますように」という、主の祈りの第一の主題であって、「揺るぐことなく信仰に踏みとどまり、あなたがたが聞いた福音の希望から離れてはなりません」(コロ 1:23)と勧められているものです。

教会が、キリストの再臨と神の国の実現を待望している“聖なる者とされた人々の共同体”であること

を、声を大にして語ろうではありませんか。洗礼を受けて「一度光に照らされ、天からの賜物を味わい、聖霊にあずかるようになり」(ヘブ6:4)ながら、その後に墮落して「主が来られる時が迫っている」という聖書の使信を本気で信じられなくなってしまうたら、「裁く方が戸口に立っておられます。」(v.9) 実に、「あなたがたの信仰と希望とは神にかかっているのです。」(1ペト1:21)

3. イザ

w.5-6 「そのとき、見えない人の目が開き、聞こえない人の耳が開く。そのとき、歩けなかった人が鹿のように躍り上がる。」

イザヤ書34章と35章は、第二イザヤ(40～55章)と著しく類似した黙示文学的預言であって、イザヤ書にいわば付録として後に付されたものです。ここには歴史の支配者であり、歴史の創造者である神による救いの終末的完成が、高らかに歌い上げられています。

神の子の第一の来臨によって、この終末的な救いの業が開始されました。しかし、それはキリストの第二の来臨によって完成するのであって、決して教会がその政治的社会的活動によって地上に実現出来るもののように思ってはなりません。

“信仰”という言葉に代えて、“待ち望む”という表現を用いた第二イザヤに従ってこのテキストを理解するとき、私たちはこのテキストを引用してイエスが洗礼者ヨハネにお答えになった使信の真の重みを、おぼろ気にでも聞き取るようになります。そして、「天の国で最も小さい者も、彼よりは偉大」なのです。

アーメン、ハレルヤ。

12月22日 待降節第4主日

イザ 7:10～14 ロマ 1:1～7 マタ 1:18～24

1. マタ

vv.20-22 「主の天使が夢に現れて言った。“ダビデの子ヨセフ、恐れず妻マリヤを迎え入れなさい。マリヤの胎の子は聖霊によって宿ったのである。マリヤは男の子を産む。その子をイエスと名付けなさい。この子は自分の民を罪から救うからである。”このすべてのことが起こったのは、主が預言者を通して言われていたことが実現するためであった。」

福音書が伝えている“イエス・キリストの誕生の次第”(v.18)を初めとする数々の不思議や奇跡は、イエスが神であることの証拠として理解され、説明されるのが、ほんの半世紀ほど前までの教会での普通の解釈でありました。それぞれの時代の信者が、かつて起こった出来事をどのように理解し、解釈するかという観点から、ある場合には護教的に、他の場合には反教會的に、聖書が読まれていたということです。

現代の教会は、福音書が“神に対する悔い改めと、わたしたちの主イエスに対する信仰とを……証しするために”(使 20:21)、「使徒たちがキリストの委任を受けて宣べ伝えたことを、後に彼ら自身や使徒とつながりのある人々が神の霊の息吹を受けながら書きとめて我々に伝えた」(神の啓示に関する教義憲章 18)ものであることを知っています。

私たち教会は、キリストの第一の来臨における出来事が確かに神の業であったことを、ただそれだけを聞かされているのであって、同様にその第二の来臨もまた神が実現されることを信じて待つようにと、呼びかけられているのです。ヨセフとマリヤのように、神の約束、すなわち秘められた計画を信仰をもって受け入れ、その到来の日を待ち望む信者になりましょう。「すべてのものは、神から出て、神によって保たれ、神に向かっているのです。」(ロマ 11:36)

2. ロマ

vv.3-4 「御子は、肉によればダビデの子孫から生まれ、聖なる霊によれば、死者の中からの復活によって力ある神の子と定められたのです。この方が、わたしたちの主イエス・キリストです。」

イエス・キリストがダビデの子孫から生まれた方であるということは、使徒たちが宣べ伝えた福音の重要な一部分でありました。なぜなら、メシアはダビデの子孫から生まれると、旧約聖書で約束されていたからです(使 13:23 参照)。「神の約束は、ことごとくこの方において“然り”となった」(II コリ 1:20)のです。

昔も今もいつの時代にも、神の約束とは何の関係もない“自称メシア”が大勢現れる中で(マタ 24:5)、教会は“キリストの”福音を宣べ伝えて来ました(II テモ 2:8)。その復活と昇天、そして第二の来臨を語らない“ほかの福音”(ガラ 1:6-7)、“使徒たちが告げ知らせたものに反する福音”(ガラ 1:8)を、私たちは見分けなければならないのです。既に久しく世間のクリスマスは、「御子に関する」(v.3)祭りではなくなって、

ツリーとプレゼントとサンタクロースの祭りになってしまっています。「しかしわたしたちは、義の宿る新しい天と新しい地とを、神の約束に従って待ち望んで」(IIペト 3:13)、今年も降誕祭を祝います。

3. イザ

v.14 「見よ、おとめが身ごもって、男の子を産み、その名をインマヌエルと呼ぶ。」

言うまでもなく、今朝の朗読配分におけるこのイザヤ書のテキストが 14 節で終わっているのは、マタイ福音書での引用に基づいています。しかし、元来のテキストの流れは 17 節まで続いています。“おとめ”とはヘブライ語で“若い娘”という意味で、恐らく宮廷でよく知られた女、もしかするとアハズ王の妻たちの一人であったかも知れません。この女が子を産んで数年の内に、ユダを攻める二人の王は捨てられると、イザヤは預言しました。それは特定の時代状況、すなわちダビデ王家の危機における預言でありました。

後の時代になって旧約聖書がギリシア語に翻訳されたとき(B.C.3世紀)、この“おとめ”という言葉に“処女”という訳語が使われて、マタ 1:23 ではこのギリシア語訳が引用されました。

主イエス・キリストの降誕の物語りに、このイザヤの預言を神が用いられるに至ったことを、私たちは驚くべきなのです。それはこの世の知恵で理解出来ることではなくて、神秘としての神の知恵でありました。「目が見もせず、耳が聞きもせず、人の心に思い浮かびもしなかったことを、神は御自分を愛する者たちに準備された」(Iコリ 2:6-9)のです。

イザヤがこの預言を語った時、彼は主に命じられて、自分の息子のシェアル・ヤシュブを伴っていました(7:3)。その名の意味は、“残りの者は帰って来る”であって、神の救済史の将来を象徴する名でありました(10:20-23 参照)。「信じなければ、あなたがたは確かにされない(存続しない/フランシスコ会訳)。(7:9) そのように、キリストの第二の来臨の日には、共にミサをささげている私たちの中の「残りの者だけが帰って来る」(10:22)ことでしょう。“現に今も、(イエス・キリストの)恵みによって選ばれた者が残っています。”(ロマ 11:5、ヘブ 12:26-29) 神に感謝！ ハレルヤ、アーメン。

12月25日 主の降誕／日中のミサ

イザ 52:7～10 ヘブ 1:1～6 ヨハ 1:1～18

1. ヨハ

v.1 「初めに言(ことば)があった。」(新共同訳) 「初めにみ言葉があった。」(フランシスコ会訳)

聖書の冒頭、創世記 1:1 の「初めに、神は天と地を創造された」をそのまま援用して、ヨハネ福音書は書き始められています。「神は言われた。“光あれ。” こうして、光があった。」(創 1:3) この「神は言われた」が六回繰り返されて、六日間にわたる天地創造の物語りが語られているのです。

フランシスコ会訳の聖書では、創 1:1～11:26 に“世界と人間の起源”という表題を付しているのですが、この“起源”とは“初め”と翻訳されている ἀρχή のことで、ただ時間的に最初にという意味ではありません。そうではなくて、創造の起源が“神のことば”であるということです。「御言葉によって天は造られ、主の口の息吹によって天の万象は造られた。」(詩 33:6) 「主が仰せになると、そのように成り、主が命じられると、そのように立つ。」(詩 33:9) さらに世界の創造におけるだけでなく、神が御自分の意志を示し、救いを語られる場面でも、「主の言葉が〇〇に臨んだ」と述べられています(エレ 1:4 他)。これらすべてにおいて“神のことば”は“起源(ἀρχή)”であることを強調しておかなければなりません。

同じヨハネ文書に属する 黙 3:14 が呼んでいるように、キリストは「神に創造された万物の源(ἀρχή)である方」なのです。この方が「肉となって、わたしたちの間に宿られた」(v.14)ことを記念するために、教会は古くから降誕節を典礼暦の中に採用して来ました。

v.14 「わたしたちはその栄光を見た。それは父の独り子としての栄光であって、恵みと真理とに満ちていた。」

おとぎ話や心の持ち方の話ではなくて、歴史の中での出来事として、「イエス・キリストは肉となって来られたということ」(ヨハ 4:2)、今年も教会はこのクリスマスの祭りで信仰宣言するのです。

2. ヘブ

v.2 「(神は)この終わりの時代には、御子によってわたしたちに語られました。」

v.4 「御子は、…… 天使たちの名より優れた名を受け継がれた ……」

私たちの救い主イエス・キリストは、“初め(ἀρχή)”であると同時に“終わり(τέλος)”であります(黙 21:6, 22:13)。創造の起源であるのみならず、その創造の目標(τέλος)なのです(ロマ 10:4)。ですから、キリストの誕生以来、救済史は終わりの時代に突入しました。「キリストは、罪のために唯一のいけにえを献げて、永遠に神の右の座に着き、その後は、敵どもが御自分の足台となってしまいうまで、待ち続けておられるのです。」(10:12)

ですからクリスマスの説教の真の主題は、キリストが“御自身の血によって成し遂げられた永遠の贖い”(9:12)であって、聖書を題材にして司祭や牧師が毎年創作する“美しいおとぎ話”ではないことを、主の降誕／日中のミサの朗読配分は教えてくれます。

3. イザ

v.7 「いかに美しいことか、山々をゆき巡り、良い知らせを伝える者の足は。彼は平和を告げ、恵みの良い知らせを伝え、救いを告げ、あなたの神は王となられたと、シオンに向かって呼ばれる。」

v.10 主は聖なる御腕の力を、国々の民の目にあらわにされた。地の果てまで、すべての人が、わたしたちの神の救いを仰ぐ。」

幸運を夢見て年末ジャンボ宝くじを買う人々のように、ただのラッキーなおとぎ話を聞くのがクリスマスだと思ってはなりません。肉となって私たちの間に宿られた言(ことば)は、“十字架につけられ、苦しみを受け、葬られ、そして復活した主”(信条)であり、「血に染まった衣を身にまとっており、その名は“神の言葉”と呼ばれた」(黙 19:13)と書かれている方だからです。この方は教会の宣教を通して「勝利の上に更に勝利を得ようと出て行った」(黙 6:2)と、見者ヨハネは証しました。

今朝のテキストを、それに続く 52:13～53:12 の“苦難の僕の歌”と切り離すことなく、主の救いの御業を深く理解して仰ぐことを、神のことばであるキリストは私たちに求めておられます。

アーメン、ハレルヤ。

12月29日 聖家族

シラ 3:2-6,12-14 コロ 3:12-21 マタ 2:13-15,19-23

1. マタ

v.13, v.15 「主の天使が夢でヨセフに現れて言った。…… 主が預言者を通して言われていたことが実現するためであった。」

過去の出来事の記録であるよりも、むしろ伝説的性格の物語りとして、マタイ福音書の第二章は初代教会のある一部の地方で流布していたものと思われます。それが教会における典礼と信仰教育のために、当時用いられたであろうということを前提にして、私たちも今朝の朗読に耳を傾けましょう。

“夢による告知”も“聖書の言葉の実現”も、すべては神御自身の御業であって、ヨセフとその家族はただ黙して従う信仰者として描かれています。この物語りでは、彼らはいささかも協力者などではない。天使は彼らに、“どうしますか”などと尋ねていない。受胎告知の時にマリヤが天使に答えたように、「お言葉どおり、この身に成りますように」(ルカ 1:38)という信仰の従順だけがすべてなのです。

この「この身に成りますように(γεννητό μοι)」は、ある英語の有名な翻訳(RSV)では“let it be”となっていて、どこかで聞いたことがある(曲の名前)と気付く人もいるでしょう。英語ならほとんどの人が分かると思うのですが、これはどんなふうにも解釈出来る言葉です。この物語りで、ヨセフとその家族が一切口を開かないその沈黙の理由を、マタイの教会では“信仰の従順”の教材として用いたのであろうと、私たちは想像します。決して、“どうにでも、なるようになれ!”ではありませんでした。

第二バチカン公会議での困難な議論の最中に、教皇ヨハネ 23 世がスーネンス枢機卿に語った言葉を、神学者テオボルドが最近の論文の中で紹介しています。「教皇の主たる務めとは、聖霊が自由に働くよう、聴き、また沈黙することだ。」今年その改訂公式訳が発売された第二バチカン公会議公文書を学んで、私たちがそこで神の啓示に出会うことが出来るその背景に、このような教皇の賢明な沈黙があったことを知ることは、実に驚きです。

2. コロ

v.17 「そして、何を話すにせよ、行うにせよ、すべてを主イエスの名によって行い、イエスによって、父である神に感謝しなさい。」

実際には私たちの小教区の有様は、聖書で勧められているあり方からは大きく乖離しているとしても、それでも今朝の第二朗読は“御旨に従う者の模範”“聖家族の模範”として、教会の頭上に掲げられていなければなりません。

“夫に仕える”“妻を愛する”“両親に従う”“子供をいらだたせない”……、どの一つをとっても実際にはなかなか困難である、うまくいかない、というのが私たちの現実です。しかし、失望することはありません。なぜなら、それらは神の救いが実現する条件ではないからです。「ただキリスト・イエスによる贖いの業

を通して、神の恵みにより無償で義とされるのです。」(ロマ3:24) 「あなたがたは、恵みにより、信仰によって救われました。このことは、自らの力によるのではなくて、神の賜物です。」(エフェ2:8) うまくいってもいかなくても、私たちは“イエスによって、父である神に感謝”するのです。

3. シラ

v.2 「主は、子に対する権威を父に授け、子が母の判断に従う義務を定めておられる。」

“聖書は、親孝行を教えている。キリスト教は、親孝行を戒めとして命ずる宗教だ”と、多くの人が考えています。キリスト教の道徳は断然優れているから他の宗教に勝っていると、そう判断している信者も多いと思います。

ところが実際には、世の中には愚かな親、無能で身勝手な親、子供をダメにしてしまう親がたくさんいて、その犠牲になった子供たちがやがて社会に適応出来なくなるようなケースが後を絶ちません。

聖書がただの親孝行という美德を無条件に主張しているというのは、実は間違っているのです。その根拠を、例えば箴言1:7-9で見てください。「主を畏れることは知恵の初め」(v.7)、そしてこの信仰の知恵を子供に教えることが父と母の務めである(v.8)と、そこには書かれています。“神のことばを心に留め、子供たちに繰り返し教え……語り聞かせる”(申6:6-7, 11:19)ことは親の務めであり、それが出来ないような親に対して、ただ親孝行をせよと言っているわけではありません。

自分で子供の信仰教育をする能力がない父親、子供を教会学校やカテケーシスに通わせて自分は責任を放棄している母親の何と多いことか、私たちは恥じ入るばかりです。自分では信仰が何も分かっていないのに、自分の子供はやがて良い信者になるだろうと期待することは、鳶(とんび)が子供を学習塾に通わせれば鷹(たか)になると勘違いするのと同じで、子供はその犠牲者です。どうして「年老いた父親の面倒を見よ」(v.12)などと、あつかましく言えるでしょうか。

天使の言葉に、直ちに「幼子とその母を連れて」(マタ2:14)従順に従う信仰、それが“聖家族の模範”です。私たちは「口に手を置き」(ヨブ40:4)、神のことばに耳を傾ける者になりましょう。そして、うまくいってもいかなくても、私たちは“イエスによって、父である神に感謝”(コロ3:17)するのです。

アーメン、ハレルヤ。